

1985 December

羊羽

NO. 54

百万石蝶談会

目 次

Page

1. 一里野でノコメキシタバを採集 - - - 野中 勝 (1)
2. オオヒカゲ調査<1984> - - - 松井正人 (1)
3. 初冬のオオヒカゲ - - - 松井正人 (3)
4. 風変わりオオヒカゲの飼育記録 - - - 松井正人 (3)
5. NOMURA AKIRA の初体験 Part 2 - - - 野村 明 (4)
6. ムモンアカシジミについての疑問 - - - 松田俊郎 (5)
7. 大塔山採集行 - - - 金子二久 (6)
8. 有峰湖のカラスシジミ - - - 松井正人 (6)
9. 短 報 3 - - - (6)
10. オサムシコーナー
2. ノトジママイマイ - - - 野中 勝 (6)
11. 会員の動き・しゃばの動き - - - 編集部 (9)
12. 例 会 の 記 録 - - - 編集部 (10)

ノコメキシタバ(*Catocala bella* Butler) は筆者の知る限りでは石川県からは唯一、金子二久氏により白峰村市ノ瀬から記録されている(翔44号)のみである。しかしこの記録は金子氏自身が書かれている様に、整理をしていたら2年前のラベルの付いた標本が出現したという、やや疑問の余地の有るものであり、本種に関しては追加記録が待たれていた。本年8月10日、ブナオ山観察舎に於いて第1回蝶談会カラオケ大会が開かれた際に、井村正行氏と共に一里野の燈火を見回り、本種を発見、採集したので報告する。

1985年8月10日 尾口村一里野 1♀(著しく汚損) 野中 勝 採集

オオヒカゲ調査<1984>

松 井 正 人

森本以北には普通に産するとおもわれているオオヒカゲではあるが、まだまだ確実な記録が少ないので1984年は2回のオオヒカゲ調査を行ない、また能登へ行く機会があった折にもオオヒカゲの産地を発見することができたので、あわせてここに紹介する。

(1) 4月30日 河北郡宇ノ気町谷

小雨の降る中傘をさして捜していると、段々たんぼの一番奥まった所にある小さな休耕田で、頭を上にしてカサスゲに静止している幼虫4exsを発見した。1exは葉表、残りの3exsは葉裏に静止していた。

(2) 5月5日 羽咋市神子原

山ぞいの雑木林より流れ出た小川の縁に名前の分からないスゲがいくらかあり、このスゲより1exを発見した。このスゲは名前を調べる為にちゃんと標本になっている。

(3) 5月5日 鹿島郡鹿島町原山峠

ボートの浮かぶ大きな池の上流に休耕田がたくさんあり、夏になるとさぞかしススキ原で立ち入れなくなるだろう所を捜していると、所々にカサスゲの群落がありその中より2exsを発見した。ここは浅く水につかっている水は流れていた。

(4) 5月5日 七尾市滝尻

県道沿いの荒地で、小川の流れている縁にカサスゲがあり、これより2exsを発見した。春はまだ夏草が繁茂していないのでスゲのありかがよくわかり、またどこへでも簡単に入って行けるので、オオヒカゲの調査にはうってつけの季節である。

(5) 5月5日 七尾市菅沢

車を運転中、雑木林の中に留池があるのをみつけたのでもしやと思い近づいた所、池のほとりにカサスゲがあり、幼虫2exsを発見した。この頃はまだ木の葉が開いていないので、雑木林はスキスキに透けてみえる。

(6) 5月5日 七尾市柑子山

国道脇より山側へ休耕田が伸びている。この数枚の休耕田にはびっしりカサスゲが生えていた。一番奥の休耕田には必ずオオヒカゲがいるだろうと思い一番奥を捜したところ、幼虫14exs を発見した。

(7) 5月5日 七尾市大田

海岸より割りと同じ所で、川沿いに休耕田がずっと奥までつながっていた。夏になるとスキスキでとても入れそうにない休耕田を奥へ歩いていくと、カサスゲがあり幼虫1ex を発見した。

(8) 5月12日 珠洲郡内浦町下出

国道より神社横を通してジメジメした足元の悪い山道が伸びていた。この山道には所々スゲが生えていたが、とてもオオヒカゲがいるような感じではなかった。ところがちょっとしゃがみ込むと3cm位の幼虫が付いていた。このスゲの名前もまだ分かっていないが、標本になっているから後で発表する事にする。

(9) 5月12日 珠洲市南黒丸

林道の側溝沿いに細く連なって名前の分からないスゲがあったので、良く見ると内浦町下出で見たスゲと同じものであった。今日はなかなかスゲが見付からないのでじっくり腰をおろしてオオヒカゲを捜すと、オオヒカゲらしい脱皮殻をひとつ見付けた。これはオオヒカゲの脱皮殻に間違いはない。

(10) 5月12日 珠洲市山伏山

この辺りの休耕田には全くスゲが見当たらない。やっとのことで国道脇にカサスゲがびっしり生えた休耕田を見付けたので、これでオオヒカゲはと思ったのだがなかなか幼虫は見付からなかった。幼虫を捜しながら1枚づつ休耕田を奥へつめていくと、結局1番奥の休耕田で辛うじて1ex 見付けることができた。

(11) 12月16日 輪島市宝立山

山はうっすら雪化粧していた。こんな時にオオヒカゲは見付かるものだろうか、見付ければ1年のうちで積雪期を除けばいつでもオオヒカゲの調査ができる事になる。こんな期待を胸に小川の方へ歩いていくと、小川に沿ってカサスゲがかなりたくさん見られた。株の間には雪が乗っていたが長く伸びた葉には食痕が見て取れたので、株の雪をそっと退けて見ると葉裏に2exsの幼虫がどれも頭を上にして静止していた。なおも捜してあと3exsの幼虫を発見したが、どれもこれもみな頭を上にして、株に近い真っ直ぐ上へ伸びている葉の地表5~10cmの所に静止していた。1exだけは葉表にいた。

初冬ともなると蝶屋はハサミ、オサ屋はピッケル、カミキリ屋はナタを持ってウロウロしている。この頃オオヒカゲの幼虫はいったいどうしているだろうか？ もしや沢山かたまっているのではと期待して捜しに行くと、スゲの葉は長く伸びて垂れ下がり、折れ曲がってたくさんの葉が入り乱れ、オオヒカゲの食痕はとうていわからず、結局第1回調査ではオオヒカゲを発見出来なかった。

第2回調査は、ハサミ、ピッケル、ナタ、ノコギリを持った鬼の様な連中と石動山へ行ったとき、偶然スゲ田に足をつっこんでしまい思いがけなくも始まった。お尻が水に濡れそうになりながら捜してみると、長く伸びたヨレヨレの葉が放射状に広がっている真ん中、つまり株の中央よりきみどり色の新しい葉が10cm程伸びていて、この葉裏より約1cmの葉とよく似た色をした幼虫が2exs見付かった。この新葉には全く食痕が無かった。同じ要領でさらに別の株を捜したところ、短い新葉はあちこちで伸びているが幼虫はいなかった。ところが早春オオヒカゲ幼虫を捜した時(*1)に見かけた様な食痕が、長いヨレヨレの葉に付いていたので、裏返して見ると幼虫が付いていた。よく見ると、これらの幼虫は葉脈に沿って長さ2cm位の台座を作り、その中央に静止していた。

(*1) 翔 NO.49 早春のオオヒカゲ

1984年11月25日 鹿島郡鹿島町石動山 オオヒカゲ2令幼虫多数

風変わりオオヒカゲの飼育記録

松井正人

これまでオオヒカゲは、5令で蛹化し、6月中旬に羽化するといったパターンをとっていた。ところが今回飼育したオオヒカゲの1頭は、休眠し6令になり、8月に入って羽化の徴候を示した。惜しいことに羽化には至らず死亡したが、蛹の中には完全な成虫体が出来上がっていた。

この風変わりオオヒカゲの飼育記録を、同時に飼育した通常の個体と共に下記に示す。

採集 1984年11月25日 鹿島町石動山 2令幼虫

	風変わり個体	通常個体
摂食開始	2月10日	2月10日
3 令	4月14日	3月25日
休 眠	4月23日	-
休 眠 起	5月27日	-
4 令	6月2日	4月10日
5 令	6月12日	4月26日(終令色)
6 令	7月4日(終令色)	-
蛹 化	7月22日	5月17日
羽 化	-	6月4日(♀)

★ 1985年3月3日(日)くもり

9:40a.m松井氏、中西氏の指導のもと、食樹の木々の種類を知る為にまだ雪の残る金沢市野田山、平栗公園、坪野の一带を図鑑片手にテーピングをした。あまり植物に興味の無かった僕は、木肌を見ただけでは何が何の木だか分からず、図鑑を見てようやく納得する心もとない状態だった。

また自宅に近い公園や近所の庭にあるアラカシやクルミなどチェックし、どの木が一番芽吹くのが早いのか、どの程度失敬できるか、自分なりにデータを作ってみた。しかし失敬する分には良心との戦いもあり、又ドキドキするスリルも味わえた。

★ 1985年4月21日(日)晴れ

5:50a.m中西氏、勝海氏、吉村氏と4人で長野県北安曇郡小谷村黒川地区へヒメギフチョウの採集に出掛けた。僕は県内のギフチョウは1頭も採集しておらず、今年はギフチョウ属を採集出来ないと思っていた所だったので期待して出掛けた。

車は富山、新潟を通り長野へと向かった。途中新潟県青海町にさしかかったころ、右手にまだ記憶に新しい2月16日、7棟全壊10人死亡4人の重軽傷者がでた地滑り跡が見えた。現場の斜面にはまだ青のビニールが掛けられており、道路も1車線通行になっていた。長野県に入り姫川に出た所で中西氏がトイレ休憩を提案、4人全員が姫川に向かいまだ雪を頂いた山々を背にし行なった。

R148を走っていると、谷の方から斜面へ小さな黒い物が飛び交うのが見えた。初めは何かなと考えていたのだが、中西氏に聞くとイワツバメとのことだった。住宅地でのツバメは見たことがあったが、イワツバメを見るのは初めてだった。そうこうしている間に目的地に着いた。吉村氏の説明、過去のデータを聞き、それぞれ別れて採集を始めた。

吉村氏いわく、「今日は1~2頭採集できれば好い方ではないかな、ヒメギフの採集はなかなか難しいヨ」と聞かされた。

10:30a.mを過ぎたころ、谷の方から飛んでくるヒメギフを発見。震える手でネットを振った。幸いヒメギフは僕のネットに入り今日の収穫第1号となった。それから1時間半程で、ヒメギフ11頭内♀2、スギタニルリシジミ♂2、ルリシジミ3頭内♀1を収穫。クジャクチョウ1頭を確認したがドジッて採集は出来なかった。次回はイモアミを買うことにした。

吉村氏によれば「今年は例年になく数も多く、採集した次期、気象条件の最も良い日にぶつかったのかも知れない。」

みんなそれぞれに満足顔だった。1:00近くになったころ昼食をとることにした。食事をしていると1匹の犬が、谷から僕達のいる所へ直角に近い斜面を駆け上がって来た。まるでマタギが連れているような根性犬だった。このような山村だとこのくらいの根性がある犬でないと、冬雪深いこの地では生きていけ

ないのかなあと感心した。一緒に記念撮影をして根性犬にサヨウナラをして
1:35p.m金沢へと向かった。

ムモンアカシジミについての疑問

松田俊郎

ムモンアカシジミについて、最近疑問に思っていることを1つ述べてみたい。それは、幼虫とアリとの関係である。ムモンアカシジミの発生する木には、アブラムシ(またはカイガラムシ)とアリがいる。なぜ3者は同一場所に見られるのであろうか。アブラムシは、甘い蜜を出し、この蜜をなめにアリが集まる。だから、アブラムシの多数ついている木には、アリも多数集まり巣を作る。さて、ムモンアカシジミの幼虫もアブラムシを餌としている。それゆえ、アブラムシとアリとムモンアカシジミの3者は、結果的に同一場所に生活することになるという考え方は、どうであらうか。つまり、アリもムモンアカシジミの幼虫も、アブラムシを求めている為、偶然同一場所に見出だされるという訳である。

私は、この考え方には否定的である。なぜなら、上の考え方ではアブラムシさえいれば、アリがいなくてもムモンアカシジミが発生するという場合も出てくるからである。現在までのところ、このような例は見つかっていないことを考え合わせると、やはり上の考え方はおかしいと思われる。したがってムモンアカシジミの幼虫とアリとには、やはり関係があるということになる。幼虫とアリとには、どんな関係があるのであろうか。原色日本蝶類昆虫図鑑(Ⅲ)シジミチョウ科によると、ムモンアカシジミの卵がフ化する直前からアリは強い関心を示し、幼虫には全令期を通じてアリがつきまとうそうである。これは、何を意味しているのであろうか。幼虫には、まだ蜜腺の存在は知られていないようであるが、おそらくアリの好む何等かの物質を出しているのであろう。(生態図鑑には、アリの好むフェロモンを出すのではないかと書いてあった。)

では、幼虫はアリに何かしてもらっているのだろうか。ムモンアカシジミの発生にアリが不可欠だとすれば、アリは一体何をしているのだろうか。これも想像だが、アリが幼虫を外敵から守ってやっているというのはどうだろう。寄生蜂や寄生バエぐらいなら守れるかも知れないが・・・ どうもこのことは、アリが不可欠ということとはあまり関係なさそうである。

もう1つ考えられることは、アリが幼虫に餌をやっているのではないかということである。キマダラルリツバメの幼虫は、アリから餌をもらって生活史を完成させているということを考えると、これは可能性無しとは思えない。こう考えれば、アリの必要性が矛盾なく説明できるのである。もちろん、これは私の想像であり、野外で確かめてみた訳でもないし、間違っているかも知れない。ぜひ、どなたか野外観察をして、真実を見付けてほしいものである。

参考資料 原色日本蝶類昆虫図鑑(Ⅲ)シジミチョウ科 保育社
(編集部より:この原稿は翔NO.53号が出る以前に編集部へ寄せられたものです。)

昭和60年7月6、7日に和歌山県本宮市大塔川にて夜間採集を行った。6日夜にはヤクシマヒメキシタバ1♂2♀、ウスイロキシタバ1♂が採れた。次の夜には少し標高の低い地点で行ったが、来たのはウスイロキシタバ2♂♂、アミメキシタバ1♂のみだった。昼間にはコブヤハズを探したが見つからなかった。尚6日夜東京より来た堀江清史、古谷健二の両氏（以前長野県白馬村深空で会いアズミキシタバのポイントを教わり且つ近年ミヤマキシタバの食樹を解明した人達）に会った。

有峰湖のカラスジミ

松井正人

有峰湖にハルニレがあることを富山県在住の山友より聞き、かつて有峰盆地にカラスジミが多産したことより、本種は簡単に採卵できると思っていた。

1984年は2度採卵に訪れ、2度目にしてハルニレを発見したものの本種発見には至らなかった。1985年は石川県内での本種採卵に成功し、もしやと思い再び有峰湖を訪れたところ、ハルニレより本種の採卵に成功した。

1985年10月9日 富山県大山町有峰湖 15卵 ハルニレ

短 報 3

★カラスジミ

1985年10月13日	尾口村三又発電所	12卵採集	オヒョウ	勝海雅夫
1985年10月26日	白峰村市の瀬	3卵採集	オヒョウ	松井正人
1985年10月27日	吉野谷村中宮温泉	12卵採集	オヒョウ	中西重雄
1985年10月27日	尾口村丸石谷	1卵採集	オヒョウ	松田俊郎

オ サ ム シ コ ー ナ ー

2. ノトジマイマイ

野中勝

MNがオサ学の弟子をとらえんと欲し、SNに白羽の矢を立てたいきさつは予告編で紹介した。SNのデビュー戦は能登島と設定された。師匠たるMNの予想では、能登島には上翅が黄色で前胸背がピンクに輝くこの世のものとも思えぬ美しいマイマイカブリ、ノトジマイマイが人知れず棲息し、オサ屋の手によって神秘のベールをはがされる日を待っているはずであった。弟子のデビュー戦を飾るにこれ以上の舞台は望むべくもないとあって良いだろう。同行者を募ったところ、蝶の分布調査病患者的の松井正人氏、マイマイに少し色気のある金子二久氏が参集し、更にあんまり関係ないけど、“にぎやかし”にということ

でカミキリ屋の井村正行氏も無理矢理メンバーにひきづり込んだ。1985年3月10日、能登島めざして走る車中は”にぎやかし”の効果てきめん、マイマイカブリ→佐渡ヶ島→ゴホンダイコクコガネ→ルリセンチコガネ→人糞トラップ→オイチモンジ→上高地→カラフトホソコバネといった具合に話題が目まぐるしく展開し、飽きることが無かった。その喧噪の中でも師匠は弟子に「一般にオサ掘りは崖、朽木を対象にするといわれているが、私の豊富な経験(?)でも石川県の朽木からオサの出た例ははなく、もっぱら崖をねらうべきである。又、石川県はマイマイの個体数が少ない様で、これまでにオサ掘りで一日に得た最高数は3頭、従って今日も一頭でもノトジママイマイが採れば大成功であり、初心者は高望みはしない方が良い。」と、さりげなくこれまでの調査経過や採集のポイントを伝授するのを忘れなかった。やがて車は有料の橋を渡って能登島へ。島内は道が縦横に走っており、地図を見ても良く分からないので適当に中央部をめざし、道わきに少し崖が見えたところで車を止める。師匠は「さあ、掘るぞ!」と勇んで飛び出したが、車から見えた崖はガサガサに乾燥しており、あまつさえおおきな石が沢山混じっていてピッケルも歯が立たない。しかたなしに杉植林地に入っていくと、あまりおいしくなさそうながらどうやら掘れるガケが出現。「こんな崖からは多分オサは出ないでしょうが、一応やってみますか。」といいつつ師匠が掘れば、弟子も並んで横をくずし出す。すると何と師匠の洞察力の鋭いことか、本当にオサは一匹も出てこなかった。やがて弟子は、来る途中での師匠の有難い御話などまるで聞いていなかったのか、近くにあった細い切り株風の立枯の皮をはがしにかかる。それを横目で見た師匠が、胸中で「ムダなことを・・・」とつぶやきかけた瞬間、「アッ、マイマイが出た!」と弟子の叫び。師匠が駆け寄って見れば正真正銘のマイマイが、予想とはほんの少し異なった姿(要するに前胸背はピンクではなく、やや青味を帯びた黒色、上翅は黄色ではなく、完全な黒色)でうごめいていた。「なるほど、これがビギナーズブラックと言うものか」と一人で納得した師匠は、放っておいてもどうやら心配の無さそうな弟子と分かれて一人で採集することにした。「朽木から採れたのは単なる偶然、本命は崖」とあくまでも自説に固執する師匠は、面目を保つ為にも必死に30分間程アチコチの崖をつついたがマイマイどころか他のオサムシすら一匹も出てこない。こんな不調の時にキッパリとあきらめるという特技を有する師匠は、「さっき弟子が採ったマイマイが最後の一匹で、もうこの島にはオサムシはいないに違いない」と自分に言い聞かせ骨の折れるオサ掘りは止めにしてブラブラと散歩をしていた。するとそこへ青いビニール袋を手にした弟子が出現、「又、採れましたよ」と袋を差し出した。中をのぞきこんだ師匠は「アッ」。そこには10匹以上のノトジママイマイがうごめいていた。弟子は毒管も持たず、畑に落ちていた肥料のあき袋にマイマイをほうり込んでいたのだ。師匠(舌がもつれながら)「どっ、どっ、どこでこんなに?」弟子「すぐそこ。行ってみますか?」師匠「ぜっ、ぜひ」行ってみればそれは一抱え程の太さの切株風の朽木。コナラらしく雑木林の縁から畑地の方へ、やや突き出す様に伸びている。弟子「これの皮をはいたら樹皮下からゾロゾロと出てきたんで

すよ。木クズをどかして部屋を作ってその中にいますよ。」 師匠「なるほど。」

弟子「その辺、もう少し捜しますか？」 師匠「モチロン！」 畑地と雑木林の間の小道をブラブラ行くと、やがて細目のコナラの朽木が目に入る。師匠、ヤブに飛び込んで皮をはぐが何も出ず。弟子「そんな乾いたのはダメ。まあ良い朽木をみつけるのはなかなか難しいですよ。」 師匠「・・・」。更に少し進むと、再び細目ながらやや雰囲気のある朽木。師匠(恐る恐る)「あんなのはいかがでしょう？」 弟子「まあ皮をはいでみなさい。」 師匠、駆け寄って勢い良く皮をはぐ。バタッ、ドタッ。マイマイが2匹落下。師匠が「やったぁ」と雄叫びをあげたことは言うまでもない。ここまでの師匠と弟子の会話を読んで、何か立場が逆なのではないかなどとくだらない疑問をもつ方もいると思う。しかし、ささいなテクニックの伝授より、弟子の持つ能力を最大限に引き出すことにこそ師匠の本当の使命があるはずで、その意味でこの日の師匠は立派に役割を果たしていることを理解していただきたい。何はともあれ一安心しているところへ金子氏登場。しぶとくもクロナガを2匹掘り出している。弟子の差し出した例の袋をのぞきこんで「ずいぶん採れましたねー。」マイマイ志向の氏としては、表面は冷静さを装いつつ、語尾のふるえは隠しきれず、その後、微に入り細にわたって採集時の状況を聞き出したことは言うまでもない。やがて金子氏も良い朽木に当たってノトジマイマイを入手。全員満足して(この際、分布病とにぎやかしのことなどどうでも良いのだ)。昼メシ。午前中に成果が上がった時の常で、ワイワイガヤガヤ楽しい一時であった。午後からは島内を走り回って、ヤナギからクロ(?)コムラサキの幼虫をはがしたり、オオヒカゲの幼虫を採ったり、逐にはエビネまで掘ったりと皆思い思いのことをしていたが、結局第二目標のゼフの記録はゼロ。オサの方は朽木の皮をめくればもちろんマイマイ、時たま良い崖があって掘ればやっぱりマイマイと、この島はマイマイ天国の様相で、わずかに弟子がマヤサン1♂を得て、記録が3種となったにとどまった。それにしても終わってみれば、総計でマイマイ約60頭、クロナガ数頭、マヤサン1頭というのは、石川県のオサ掘り史上初のマイマイ大量採集の快挙。その原動力となった弟子の華々しいデビューには、以後の大活躍を予想させて余りあるものが有るのであった。

(追記) その後、東京の荒井充朗氏より、「はねなし段丘」68(1982)に、能登島の記録として、マヤサン、ヤコン、クロナガ、マイマイが挙げられていることをご教授頂いた。又、この島のマイマイの形態に一言触れれば、金沢市周辺のものと比較して、体型が太目で、前胸背の青味も強い個体が多い様に感じる。しかし、その差は軽微で、ノトジマイマイと特別の名を与える程のものでは無いと結論された。(MN記)

(追記Ⅱ) 既に読者諸兄には御気付と思われませんが“オサムシコーナー”が2から始まっています。これは間違いではありません。1は“治虫に手を染める”中西重雄(52号)です。編集人の手違いにより52号には“オサムシコーナー”のタイトルを付け忘れしました。誠に申し訳ありません、謹んでお詫び申し上げます。(MM記)

会員の動き・しゃぼの動き

★10月1日発行、京都蝶の会の連絡紙“蝶道”NO.97に、何やら面白い話が載っていた。『白山ベニヒカゲを追ってキベリと体面』に、“白山の表玄関である福井富山県側の白峰から別所出合まで”とあった。これにはいささか驚いた。

★10月10日吉村氏、山中町ヘムラサキシジミの調査。温泉の奥でスジボソヤマキの乱舞を見る。

★10月12日野村氏、突如肺に穴があき、城北病院へ。救急入院の為か老人部屋に押し込められ、ぼけが移るとぼやく事しきり。早々に退院してしまった。

★10月13日勝海氏、松井氏、白山スーパー林道へカラスシジミの調査。卵は確認したものの午後は大暴風雨に見舞われた。落石の中、直撃を受けた車を横目に命からがら逃げてきたとか。

★月刊“おあしす”を知っていますか？チラチラ見ていたらきれいな昆虫写真が載っていました。虫をかなり知ってるような写真だったのでじっくり見ると、カメラマンは百万石蝶談会幽霊会員こと小幡英典となっていました。

★10月19日金子氏、医王山にて燈火採集。寒風強く、火器で暖をとろうとしたところ、ガソリンが漏れ、あわや山火事寸前！

★10月20日中西氏、志賀町矢田へ早くもオサ掘り。コクヌストsp. センチコガネsp. マイマイ アキタクロナガ等の獲物あり。

★10月20日松井氏、澤田氏、山王坂遊歩道へヒサマツの調査。ウラジロの大木はあったものの、卵の確認には至らなかつたらしい。惜しい。

★嵯峨井氏、最近採集に熱が入らずもっぱらパチンコ狂い。ところがその辺りのシロウトと違い、財を成しているもよう。あがりの使途先はもちろん文献。

★若林守男大先生がおっしゃいました。“1つの学会に独立した2つの雑誌が有ることには無理がある”我が会誌は“翔”一冊のみ、硬いものから柔らかすぎるものまで、色々取りまとめて面白くなってるよ。

★10月25日金子氏、岐阜県神岡にて野外ゼミ。昼休みにちょっと手を伸ばしたら、メスアカとミズイロが採れたとさ。

★10月27日中西、松井、松田の3氏、中宮温泉から丸石谷にかけて採卵調査。カラス、ウラクロ、メスアカ、フジが採れた由。

★10月28日野中氏、アメリカ大陸へ。来年の移住に先駆けての下見らしい。ボストンへ2週間の予定？

★10月28日近藤、松井、吉村の3氏、金大アオイ屋敷にて何やら密談。某種は某処か??? 摩訶不思議なる会談

★10月越中むしの会からついに会誌が発行された。その名も“雷蝶”。3年目にして創刊の運びとなつたらしい。表

紙をトラフシジミ異常型の写真で飾り、活版印刷32ページと盛りだくさん。富山の虫から遠くフィリピンの虫まで色々載ってるよ。尚、連絡紙は“越虫”と言って10号くらい出ているみたい。

★11月3日吉岡氏。六華苑にて真奈美さんとめでたく御結婚。新居は大阪、TEL 0729-63-2792。皆さんどしどし御祝いの電話をかけてあげよう。

★11月3日松井、中西、金子の3氏、奥池へ。知る人ぞ知るかの雪中大行軍の地であるが、雨男のいない日本は大快晴のポカポカ陽気。ところが世の中そんなに甘くは無くカラスはスカでフジが少々見られただけ。

★11月6日松井氏、社用で1週間程四国へ。ベニカラをせしめてきたのは言うまでもない。

★11月17日中西氏、雷雨について倉ヶ岳へオサ掘り。豪雨の中間近に雷鳴を聞いた時にはさすがにピッケルを放り投げたらしい。それでも成果は20数頭。
同日対向馬だった野中氏は時差ボケでダウン。

★11月某日勝海氏、能登海浜を快適にドライブ中、警邏中の覆面パトカーと遭遇。パトカーと気付かずドライブを楽しんだところ、40kmオーバーで120日の免停をくらってしまった。現在、足がなくて何処へも行けず、こたつの中で死んでいる模様。

★ヒロコこと松井夫人は最近会合に全然顔を見せないが、何をしているのだろう。きっと松井氏が箱に入れて、隠

しているに違いない。見せろ見せろ！

★11月22日夜より4日間、松井、中西ことMN強行軍東北地方へ。米沢の某名ガイドと共に岩手県を掘りまくる。キタカブリ、アカガネ、マークがポロポロ。夜は夜で燈火採卵とか。編集部インタビューに中西氏“野中さんマーク掘りましたよ”松井氏“青森を掘って次ぎは渡島だ！”2氏による東北2000kmレポート次号掲載予定。

★12月5日野中氏、福岡で開催される□○学会に出発。帰りにちょっと対馬へ寄るとか。こんなミエミエの擬装工作でコロリとだまされるのはだれだ。実は対馬が本命で、12月30日出発の本隊に先駆けての予備調査なのだ。

例会の記録

10月11日大桑町城南管工にて開催。出席者は、井村、小幡、金子、近藤、野中、松井、松田、山岸、野村、澤田、竹谷の各氏と中西夫妻。

翔は53号より委託コピーとなり50部の作成となった。会誌交換は、越佐昆虫同好会、山陰むしの会、岐阜昆虫同好会、グループ多摩虫、飛驒むしの会が快く承諾して下さいました。

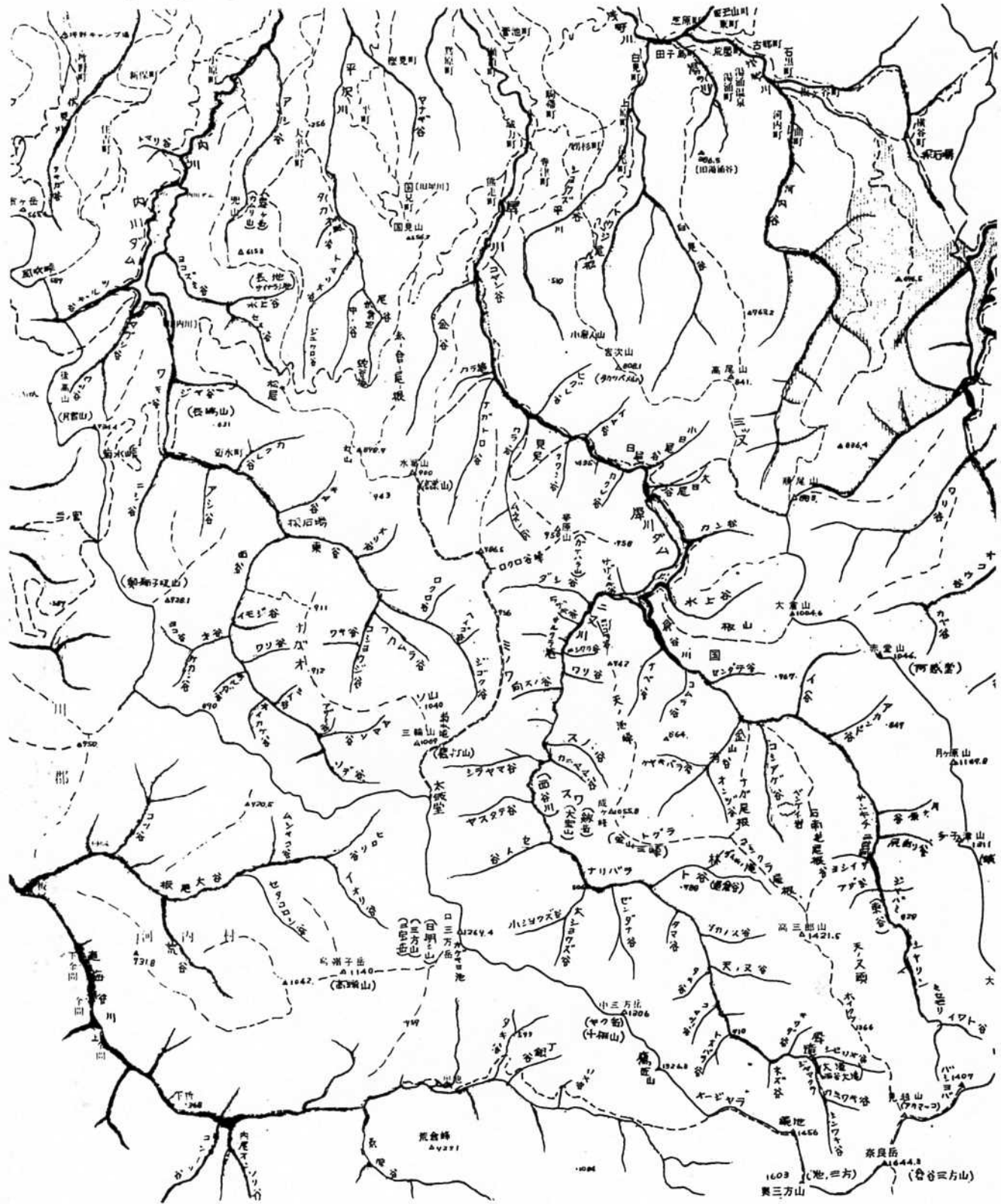
今回はオサムシグループが弟子獲得の為に大デモンストレーションを試み、パックを施したきれいきれい獲物の大公開。

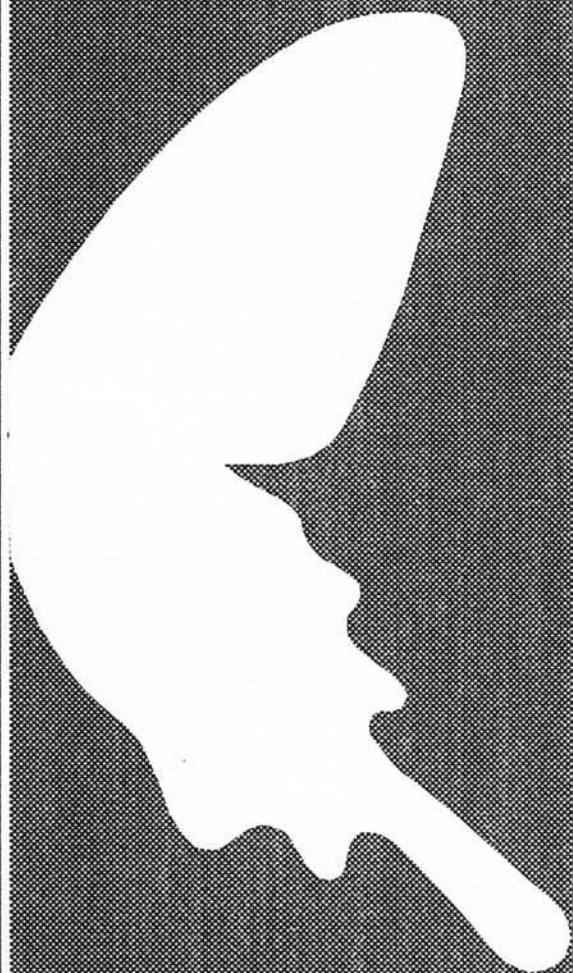
また竹谷氏により、石川県初のミヤマカラスシジミ成虫の生態写真をはじめ今年撮影の一部が公開され、スライドグループの気運もにわかになら高まった。

多忙を極める勝海氏は電話にて参加。今年のゼフ卵は少ないらしい。

屏奥地名圖

1000 500 0 1000 2000 3000 4000





とぶ NO. 54 1985年12月6日(金)発行

発行 金沢市大場町東871の15 松井正人方 百万石蝶談会

編集・校正 松井正人